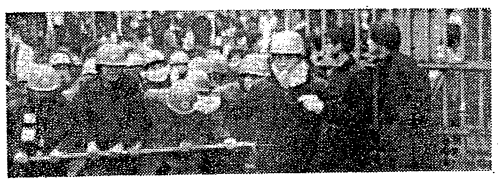

989号　1974年 4月 23日発行

# 中央大学新聞

【発行所】千代田区神田駿河台3の9

【第2、4火曜日発行】　中央大学新聞学会　振替口座東京47046定価30円

水門の潮のくだり
海くだり後も暗に
置きてか行かむ
斉明帝

# 情況の鞍部へ

## 根源に向かって矢を放て！

三上治

みかみ・おさむ。共産主義者同盟（赤軍）機関紙委員会所属
一九四一年四月九日生れ。
一九六〇年、中央大学入学
一九六二年、再建社学同委員長
一九六六年、中央大学中退
一九六七年、第2次共産同所属
一九七〇年、共産同「赤旗」編集委員会所属
著書に「戦闘の指針」（現代思潮社）などがある。

### 切実な課題とは何か

—情況の鞍部—

ここ十数年の生と闘いの中で避けようとも避けられないものとして繰りつづけてきたものは何か。別の表現を使えば、あらゆるものをとり払ったのちに己の眼前に残る最も切実な課題とは何かということである。それはあらゆる「価値観」や「判断基準」が解体しながら、それに伴う激しい流動を目前にしながら、これらと拮抗する世界を内部生命として構築することの困難さである。もしも、人間の実存の形式を最も簡明に述べれば次のようになる。自己の感性的活動（生命的活動）は、時・所や関係すべて、いいかえれば時間や空間の累積であり、この累積が機能性へ転化していく歩みである。感性的活動（生命的活動）は歴史の産物でもなく、非自然としての疎外（精神）の論ではない。自然一般ともども意識とも区分される人間的自然としての感性的活動（生命的活動）はこのような時間、空間の弁証法的累積と運動なのだ。そしてこのような時間、空間の弁証法的累積運動としての感性的活動（生命的活動）は表現と行為というように現象するが、個の生誕と死の曲線と措定の時代と環境の中で存在する。個の生誕と死という生涯の曲線と措定の時代の環境の中に、人間の実存としての感性的活動（生命的活動）は歴史の産物でもなく、非自然としての疎外（精神）の論ではない。自然一般ともども意識とも区分される人間的自然としての感性的活動（生命的活動）はこのような時間、空間の弁証法的累積と運動なのだ。そしてこのような時間、空間の弁証法的累積運動としての感性的活動（生命的活動）があるということは人間が「個」と「類」の接点で、歴史性と現存性の交点で生きるということである。別のいいかたにおけば自己（個の内部）世界を成立させたとき、人間にとっては結ぶべき次のような自己（個の内部）世界と外部世界との関係が存在し、逆に個の契機が世界の形成をなしたとき、人間としての個は存在するということにほかならない。

私達が今、生きる、闘うということが「疎外的」なのだというように暗いつきものをのように暗うならばならぬとすれば、人間の実存の形式や構造が、最も簡明なところで、それ故に深部で危機に遭遇しているということである。情況の鞍部のうちに私達が措つづけなければならないところである。

人間の実存の深部で形成されている危機は「個」として、「類」としての人間が、時間や空間の様式において、自己の生命的活動を構造化して、累積することを失っていることである。「個」の側に引きつけてみれば、「類」的な「世界」的な普遍現象、そこで生起している事柄を、判断して解することと、対関係することが不可能に近いほど困難になっていることである。「類」の側に、引き寄せてみれば、個の契機をその構成の中に繰り込めなくなっているということである。

いくつかの例をあげてみよう。ウォータ・ゲート事件とアメリカ型官僚国家の危機、ソルジェニーツィン事件・林彪事件と連・中国型官僚国家の危機、連赤事件や中核・革マルの内ゲバ、どのような性質の例をもってきてもよいのであるが、これを本質的判断としてとらえるほかない。

ウォータ・ゲート事件とアメリカ型官僚国家の危機、ソルジェニーツィン事件・林彪事件と連・中国型官僚国家の危機、連赤事件や中核・革マルの内ゲバ、どのような性質の例をもってきてもよいのであるが、これを本質的判断としてとらえるほかない。

「世界」的な錯覚象、そこで生起している事柄を、判断して解することと、対関係することが不可能に近いほど困難になっていることである。「類」の側に、引き寄せてみれば、「個」の

前号（九八八号）の二面より、共産研の学園争論括文書の続き（第Ⅱ章、第三節、(2)の一部と(3)、(4)、を掲載致します。

# 補足

## 学園の怒り

## 国家と国家的諸団体と政治社会

欧米諸派ですが「政治集団」であって、非党派は「社会集団」だとする概念について、その誤りを決定的にするため、補足を行っておく。

Ⅰ　国家論の系譜は、ほぼ三派に分かれている。その第一は、社会統体説で、国家の成立を「コンミューン的団結」に発展するものであり、第二は、国家暴力機関説で、国家の暴力性（gewalt）を強調するものである。レーニンにはじまるロシアマルクス主義は、この国家暴力機関説の総称使用であった。第三は、国家の統力合性（macht）と暴力性（gewalt）は、命題の実在一体をなすものであり突破不可能な存在性としてあるとし、この二重性がかみ合い錯綜しているものとしてあるとする。そして、エンゲルスの第三権力論を取り入れて、政治的国家を政治的共同体が機構化して変じ政治的体制的な実体化されて国家の意味内容的な実在性があるという概念を生みだしたわけだ。と言本は、社会的国家をアルジャンシーの機構・制度論に基づき、法と官僚政治的活動面という二元論に変形して、この経済的活動とは、総べる。

我々は、社会集団（三派参者いう社会集団ということにならなく本論では、非政治集団として把えるのが、本来的な意味で社会集団ではないまでも、そういった

## サークルの2重性と政治的国家

さて、サークルについて述れよう。

サークルに関しても先述のことと同様の論点で彼らの概念の破壊を明白だ。社会的国家との闘いは社会闘争。それを担うのが社会集団という論理は、先述の所でもふれたが、このことを踏まえた上での社会集団＝サークル様体という規定として、ここで問題とする課題の中に正しい概念的把握と基づき、サークルについて述べる。

この社会集団＝サークル様体という認識は、彼らによれば、その当然の帰結として（他派二元論を機能している意識の様式や、一般個体の国有性内面と関わらず転変的な意識の変化をとらえ、その実在性を論証するのに現代的で重要な経済学の諸問題をもわかりやすく解説しとかく型にはかりがちな大学での講義や教科書を補い、経済学への親近感と理解度とを深めるとともに学習能率の向上をはかろうとするもので、基本文献の紹介、諸理論・学派・諸潮流の紹介等学習の指針（内容と発行予定）　1・マルクス経済学／鈴木鴻一郎編著　2・経済学史／杉原四郎・藤山泉編著　3・経済政策／丸尾直美編著　4・国際経済／田中喜助編著　5・現代産業／中村秀一郎・鶴田俊正編著　6・現代金融／川口弘編著　以下続刊

## 経済セミナー

毎月25日刊　4月号　発売中360円

経済学入門―戦後日本の名著から……早坂　忠
集団の経済行動―研究の視点……西部　邁
数量経済史―経済史における数量的接近……新保博・速水融・西川俊作
経済発展論―問題の設定……西川　潤
円の起源―江戸幣制と貨幣的経済……三上隆三

見はてぬ夢／越村信三郎　アメリカだより／木村憲二
▼日本経済のうごき　▼世界経済のうごき　▼日本経済の基礎知識　▼石油危機下の就職戦線／岡田悠一

## セミナー経済学教室

一隔月刊一　全14冊

これから経済学を学ぼうとする人々のために、経済学の最も基礎的なエッセンスを提供し、さらに現代的で重要な経済学の諸問題をもわかりやすく解説しとかく型にはかりがちな大学での講義や教科書を補い、経済学への親近感と理解度とを深めるとともに学習能率の向上をはかろうとするもので、基本文献の紹介、諸理論・学派・諸潮流の紹介等学習の指針（内容と発行予定）　1・マルクス経済学／鈴木鴻一郎編著　2・経済学史／杉原四郎・藤山泉編著　3・経済政策／丸尾直美編著　4・国際経済／田中喜助編著　5・現代産業／中村秀一郎・鶴田俊正編著　6・現代金融／川口弘編著　以下続刊

1・マルクス経済学　鈴木鴻一郎＝編著　4月刊・予七〇〇円

▼講義篇　鈴木鴻一郎　（第1篇／流通形態　第2篇　資本主義的生産過程　第3篇・資本主義的生産の総過程）
▼特殊講義篇　唯物史観と経済学／岩田弘　貨幣の資本への転化／浜田好通　価値生態の論証／春田素夫　流通費用／佐美光彦　価値と価格／桜井毅　商業資本／吉沢英成　利子と利潤／五味久寿　産業循環／山口重克　株式資本／伊藤誠　原理論と帝国主義論／星野中　原理論の体系とその課題／鎌倉孝夫
▼学習案内篇　これから経済学を学ぶ人のために、どういう本をどの順序で読むか、学習上の手引きを懇切に指導する

## 時鐘

伝説の時代は遠ざかる。

陽光の四月はあたしたちの生の残り出させているということは疑い得ない。当選者発表がいかに盛況であっても、あの喜びの声援に答えて、あらゆる選挙の一面が、あたしたちの世界への異様なまでの困惑としてあるわけではない。

ただ、選挙戦は、かくもたやすく通学生活に、新聞に、街頭に入り込んでしまう。一体、これほどまでに、無関心層が多いのか。本来的に断つておられないからだちでもある